



# プロジェクトニュース

## シエラレオネ 地域開発能力向上 (CDCD) プロジェクト

「本邦研修 仙台～正確な情報・知識と行政の信頼～」号

2017年7月31日号 (Vol.46)

シエラレオネ行政官の研修員一行は、東松島市で招へい事業参加者の大臣一行と別れ、仙台市へと移動しました。仙台では2日間にわたり、保健行政についての講義・視察を行いました。

仙台1日目は、東北大学東北メディカル・メガバンク機構の土屋先生に日本の保健行政の概要について、講義をいただきました。講義では、日本が直面する少子化、高齢化といった問題に加え、子ども貧困や自殺問題と、これらの問題に対する国・自治体の施策や支援について説明をいただきました。

研修員からは、「日本はインフラや生活環境が整っており、自治体からの支援も十分にあるにも関わらず、なぜこのような問題があるのか理解しがたい。」という声が多数あがりました。

自治体が行う感染症予防の手洗い啓発については、「エボラウィルス病が流行した際、正しい手洗い方法の指導を受けたが、難しくてなかなか覚えられなかった。私たちでも難しいのだから、子ども達は正しい手洗いの手順を覚えられないのではないか。」という発言がありました。土屋先生から、「日本の学校では、歌を使って楽しみながら子どもでも手洗いの手順を覚えられるよう、工夫している。」という話が紹介されると、研修員は大人から子どもまで誰もが理解できるよう工夫した啓発活動が行われていることに感心していました。

翌日は、仙台市の職員の方々から保健政策や感染症対策など、実際に地方自治体を実施する取り組みや市民への広報について学びました。

仙台市が実施する支援の中で、研修員の関心が高かったのが妊娠中や出産後の母親へのケアや両親学級等を通じ、父親が育児を学ぶ機会を提供していることでした。女性研修員からは、「シエラレオネでは、出産後それぞれの家族で子供を育てており、出産後に特別な支援はないし、それに対して問題もない。なぜ出産後の母親への支援が必要なのか？」という質問があがり、核家族化が進む日本の家庭環境が紹介されました。



土屋先生による講義



健康政策課による講義

感染症予防・対策については、結核・エイズを例に、仙台市の対策・予防方法、特に病気に対する偏見を無くす配慮について説明していただきました。担当の方からは、「日本でも結核は昔、死に至る病気で、感染して他人へうつす状態になると隔離されることから、結核患者に対する偏見がありました。保健師が定期的に患者宅を訪問して医療支援を行っていましたが、患者の家族や地域住民に知られないよう、患者の家から離れた場所に車を駐車し、歩いて家に向かうなど配慮をしていました。また、エイズに対する十分な情報、知識が定着していなかった頃、一部では正しくない情報が伝えられたことで、差別や偏見が助長されたと言います。この時、仙台市では正しい情報源から情報を得て、医療施設、教育現場、テレビ・ラジオなどのツールを活用し、市民に対して正しい情報を繰り返し発信し、正確に理解してもらえるよう努めました。」というお話がありました。



保健所の視察

シエラレオネでも、「エボラウィルス病の元患者に対し、当初は十分な知識が定着しておらず、握手を拒まれるなどの差別や偏見があった」と行政官は皆言っています。中央政府は混乱を収めるため、正しい情報を伝える尽力をしましたが徐々に、住民との距離が近い地方自治体が正しい情報を早く伝える役割を担うこととなりました。

そのような経験もあり、仙台市役所の方の話を聞いた後、研修員は地方自治体が住民に対し正しい情報を発信することの大切さを再確認したようです。

以上